

「町の当たり前」もユニークな 「ハレとケ」に 危機に瀕する祭りの 口伝を次世代に残したい

言い伝えとなっている地域の歴史や無形文化を図書館が主体となり保存する「山梨ふるさと記憶遺産プロジェクト」。その背景や現状について、やまなし in depth からダイジェスト版でお届けします。

消えゆく歴史と文化を残そうと、山

梨県は「山梨ふるさと記憶遺産プロジェクト」を始め、2023年3月、2つ

の冊子が出来上がった。その一つ、市

川三郷町のテーマは「祭り」。



表門神社の御幸祭で神輿が渡河する「芦川の川渡り」

いつも、そこにある日常」に光が当たるまでのストーリーを追った。

…消えゆく語り部

山梨県の各地域には無名の先人たちが数多の困難を乗り越えて築きあげてきたストーリーがある。しかし、少子高齢化が進みコロナ禍による社会の変化が進む中、語り部は次第に姿を消し、口伝は歴史の中に埋もれてゆく。

このままでいいのか……。2021年6月定例県議会で話題になった。

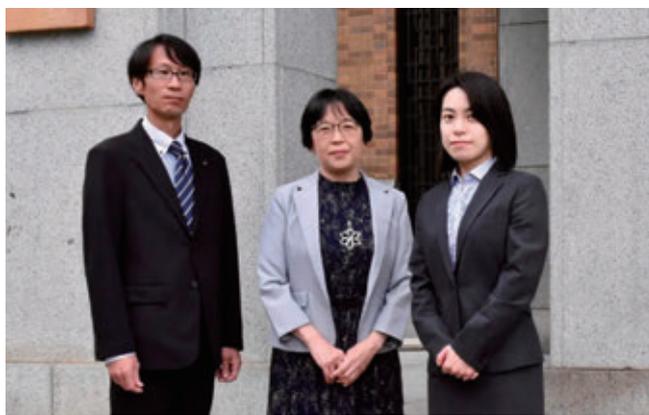
宮本秀憲 県議 オンライン化が進み、図書館に行かなくてもスマホでさまざまな情報入手できる時代になった。しかし、言い伝えとなっている地域独自の歴史、無形文化など（は形にして残さなければ途絶えてしまう。これら）を地域の図書館が主体となって保存すべきではないか。その図書館を訪ねなければ知り得ないことがあれば、地域の図書館の付加価値を高めることにはならないか。

長崎知事 県内各地に伝わる記憶を後世に引き継ぐことは極めて重要だ。地域固有の文化と歴史を記録・発信・継承する拠点の機能を地域図書館が担うということは、十分に検討に値する。

さらに知事は答弁を続けた。

「継承されるべき地域の文化と歴史は、正史としての郷土史にとどまらず、地域の多様な方々の体験やストーリーといった、ふるさとの記憶」を収集したものであればと考える」

この知事答弁をきっかけに、「山梨ふるさと記憶遺産プロジェクト」が2022年に始まった。目的は「県内各地の歴史や文化、人々の体験、先人たちの記憶や物語などを記録・収集し、保存し活用していくため」だ。



記憶遺産プロジェクトを手がける生涯学習課のメンバー。左から、伊藤伸二課長補佐、辻由樹主幹、佐久間絵梨技師

プロジェクトを進めるため、生涯学習課は2022年の2月、県内市町村に向けてプロジェクトを説明し、「記憶遺産」への協力を求めた。すぐに市川三郷町が名乗り出て、プロジェクトは順調に始まるかに見えたのだが――。

…「祭りはどうでしょうか？」

2022年8月、市川三郷町生涯学習センターの会議室で、県庁職員と町職員ら8人の男女が頭を抱えていた。

記憶遺産プロジェクトで扱うべきテーマがどうにもしっくりこないからだった。というのも、当初町から出されたアイデアは、伝統産業の花火、印鑑、大塚人參。

どの案も産業に傾きがちで、知事が言う「地域の多様な方々の体験やストーリー」といった、ふるさとの記憶」と言えるだろうか……。

口数が少なくなった会議室で、生涯学習課の課長補佐である伊藤伸二さんが発言した。

「祭りはどうでしょうか？」

地元の旧市川大門町出身の伊藤さんはさらに続けた。

「市川三郷町にはたくさんさんの祭りがあります。それこそ口伝でしか残っていないものもあります。地元の人たちは知っていても、多くの県民は知らないのではないのでしょうか」

祭りの中にはコロナ禍で中止になり、そのまま途絶えてしまっているものも

あった。だから、いま「記憶遺産」として取り上げるのは、タイミングとしても悪くない。だが、市川三郷町立図書館の小林可苗さんは「自分の一存では決められない」と答えて、いったん町に持ち帰って検討することになった。

●●● 祭りが続く日常「ハレとケ」が一体となった市川三郷町

伝統産業に恵まれた市川三郷町は、年間を通じて極めて多くの祭りが催される全国的にも珍しい地域でもあった。

民俗学者の柳田國男は日本人の伝統的な世界観として「ハレとケ」の概念を唱えた。非日常的な祭りや儀礼、年中行事が「ハレ」で、日常の普段の生活が「ケ」。「晴れ着」はまさしく「ハレの日」のための衣装のことをいう。

そんな「ハレ」の祭りが市川三郷町では日常に溶け込んでいる。この町では、年間100日もの多様な祭りがあるといふ。年間365日、粗い計算で3・5日に1回は開かれ、週に2回はどこかで祭りがある。これだけ多くの祭りがあると、ハレとケの境界はあいまいになってくる。

●●● 「祭り」に決定、取材を開始

「町の当たり前」や「町民の記憶の中だけにある祭り」を取り上げることに町立図書館の小林さんらは一抹の不安を抱いていたが、「祭りの記録を文字として残すことは、今後しなければなら



「記憶遺産」の冊子をする市川三郷町立図書館の小林可苗さん

ないこと」(小林さん)と賛同した。こうして、テーマは「祭り」に決まった。しかし、多くの祭りがあつて全てを取材することは現実的に難しい。どの祭りを本に書くか、誰に話を聞くべきか、は小林さんに託された。

「町の人の協力を得て、取材対象者を選びました。取材は11月の1日から11月の8日の間に短期間で行いました。1人ずつ聞いた方もいれば、3人集めて座談会というような形をとったときもあります。座談会形式だと、参加者の話と呼び水になってより幅広い話を聞けるのではないかと考えました」(小林さん)

取材を続ける中、すでに中止となっていた祭りもあった。また、言い伝え

でしかなかった多くのことを発掘し、文字に記すことができた。

●●● 地域の先人たちが伝えてきた物語を残していきたい

小林さんが収集した「記憶遺産」は町立図書館に収蔵されている。消えようとしていた祭りは、形を変えて後世に伝えられることになった。

旧市川大門町出身の伊藤さんは故郷に想いを寄せた。

「高校まで過ごした私の故郷をあらためて訪ねてみると、にぎやかだった街並みはだいぶ寂しくなっていました。今回の『記憶遺産』のプロジェクトで取り上げた祭りを契機に、再び故郷が元気になってほしいと思いました」

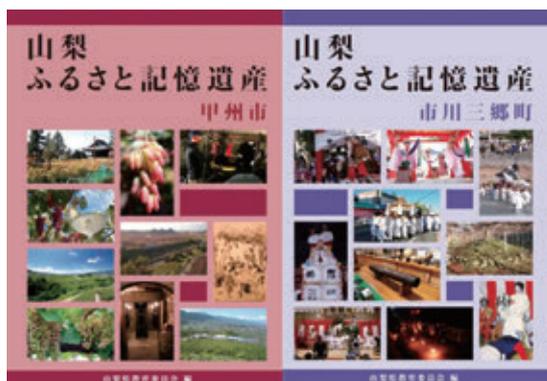
小林さんも今回のプロジェクトを通じて、新たな気づきがあったという。「町の人が当たり前と思っていることでも、異なる視点から見ると当たり前ではないということを学びました。市川三郷町には後世に残すべき文化や遺産がまだまだたくさんあるのではないかと思います」

●●● 教育や観光にも記憶遺産を活用

この記憶遺産プロジェクトは、今年度も続く。

出来上がった冊子は、その地域の図書館に収蔵され、「文化と歴史の記録・発信・継承の拠点」となる。司書でもある県生涯学習課の佐久間絵梨さんは

プロジェクトの今後について、こう語る。「図書館にはいろいろな機能がありますが、地元の郷土資料を保存して活用してもらおうようにすることも大事な機能です。その図書館に行かなければ見られない冊子を作ること、図書館の魅力を高め、教育や観光にも活用していきたいと考えています」



冊子は2冊ともA4判、32ページ。「山梨ふるさと記憶遺産 甲州市」は甲州市立図書館と山梨県立図書館に、「山梨ふるさと記憶遺産 市川三郷町」は市川三郷町立図書館と山梨県立図書館に所蔵されています。

やまなし in depth
フルバージョンはこちらから

